

令和5年度病害虫発生予察情報 発生予報第5号(7月)

令和5年7月26日
発表：福島県病害虫防除所

1 果樹

| 作物名 | 病害虫名 | 地方 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠 | 防除上注意すべき事項 |
|-----|------------|-----------|------|-------------|--|--|
| リンゴ | 斑点落葉病 | 全域 | — | 平年並 | 新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。 | 天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。 |
| | 褐斑病 | 全域 | — | やや多い | 新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。 | 現在、本病の二次感染期であるので、感染拡大を抑制するため天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する(令和5年7月21日付け令和5年度病害虫防除情報(リンゴ褐斑病)参照)。 |
| | 黒星病 | 全域 | — | 平年並 | 新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。 | 発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。 |
| | キンモンホソガ | 全域 | — | 平年並 | 新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。 | |
| | ハダニ類 | 全域 | — | 平年並 | 新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。 | 園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。 |
| モモ | 灰星病 | 中通り | — | やや少ない | 果実での発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(-)。 | 収穫期の20日前頃から果実感染がしやすくなるため、特に不順天候時は散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。 |
| | せん孔細菌病 | 中通り | — | 平年並 | 新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。 | 発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 |
| | モモハモグリガ | 中通り | — | 平年並 | 新梢葉被害の発生ほ場割合は平年よりやや高かったが、被害程度は高くなっておらず、前回調査より発生ほ場割合も低下している(±)。 | 発生が多いほ場では、収穫後であっても薬剤散布を実施する。 |

| | | | | | | |
|------|-------|-----|---|------|------------------------------------|---|
| モモ | ハダニ類 | 中通り | － | やや多い | 新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。 | 園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施する。 |
| ナシ | 黒星病 | 全域 | － | 平年並 | 新梢葉及び果実での発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 |
| | ハダニ類 | 全域 | － | 平年並 | 新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施する。 |
| 果樹共通 | カメムシ類 | 全域 | － | 平年並 | リンゴ、モモ、ナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 園地への飛来を確認したら薬剤散布を実施する。 |

注) 予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

| | |
|----------|--|
| モモ ナシ | <p>■ナシヒメシンクイ</p> <p>病害虫防除所の7月上旬の巡回調査において、モモ新梢のナシヒメシンクイによる被害の発生ほ場割合は平年より高い状況でした。</p> <p>ナシヒメシンクイ第3世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、8月1半旬頃と予測され、第4世代幼虫の防除適期は8月2半旬頃と推定されています（農業総合センター果樹研究所、7月18日現在）。</p> <p>本種はモモ等の核果類の新梢伸長が停止するとナシ果実への寄生が増加します。モモでの新梢被害を防ぐとともに、例年ナシの果実被害が多い地域では、今後の防除を徹底してください。</p> |
|----------|--|

2 野菜・花き

| 作物名 | 病害虫名 | 地方 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠 | 防除上注意すべき事項 |
|-------------|--------|----|------|-------|---------------------|---|
| 夏秋トマト（被覆栽培） | 灰色かび病 | 全域 | － | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。 |
| | 葉かび病 | 全域 | － | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。 |
| | アブラムシ類 | 全域 | － | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ほ場の開口部をネット被覆するように努める。 |
| | コナジラミ類 | 全域 | － | やや少ない | 発生ほ場割合は平年より低かった（－）。 | ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 |
| | アザミウマ類 | 全域 | － | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。 ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 |

| | | | | | | |
|-----------------------|-----------|-----|---|-------|--|---|
| 夏秋トマト（被覆栽培） | ハモグリバエ類 | 全 域 | — | やや少ない | 発生ほ場割合は平年より低かった（－）。 | まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。 |
| 夏秋キュウリ（露地栽培） | べと病 | 全 域 | — | 平年並 | 発生ほ場割合は平年より高かった（＋） が、天候予報（仙台管区気象台7月20日発表）によると、向こう1か月は気温がかなり高くなると予想されている（－）。 | 多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。 |
| | うどんこ病 | 全 域 | — | やや少ない | 発生ほ場割合は平年より低かった（－）。 | まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。 |
| | 炭疽病 | 全 域 | — | やや多い | 発生ほ場割合は平年より高かった（＋） 。 | 発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、加湿防止、資材の消毒に努める。 |
| | アブラムシ類 | 全 域 | — | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 |
| | ハダニ類 | 全 域 | — | やや多い | 発生ほ場割合は平年並であった（±）が、天候予報（仙台管区気象台7月20日発表）によると、向こう1か月は気温がかなり高くなると予想されている（＋）。 | 低密度時から防除を徹底する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。 |
| キク（露地栽培） | 白さび病 | 全 域 | — | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。 |
| | アブラムシ類 | 全 域 | — | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 |
| | ハダニ類 | 全 域 | — | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 低密度時から防除を実施する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。 |
| | アザミウマ類 | 全 域 | — | やや多い | 発生ほ場割合は平年より高かった（＋） 。 | ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。 |
| | ハモグリバエ類 | 全 域 | — | 平年並 | 発生ほ場割合は平年並であった（±）。 | 中位葉以上での発生に注意し、低密度時から防除を徹底する。 |
| リンドウ ※過去7年間の平均値と比較 | 葉枯病 | 全 域 | — | 例年並 | 発生ほ場割合は例年並であった（±）。 | 多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。 |
| | ハダニ類 | 全 域 | — | やや多い | 発生ほ場割合は例年より高かった（＋） 。 | ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 |
| | リンドウホソハマキ | 全 域 | — | 例年並 | 発生ほ場割合は例年並であった（±）。 | ほ場をよく観察し、防除を徹底する。 |

| | | | | | | |
|-------------|-------|-----|---|------|--|--|
| 野菜・花 き共通 | タバコガ類 | 全 域 | — | やや多い | 発生ほ場割合は平年並であった (±)が、天候予報(仙台管区気 象台7月20日発表)によると、向 こう1か月は気温がかなり高くな ると予想されている(+) | 生長点付近をよく観察し、寄生 や被害が見られた場合は、速やか に防除を行う。 |
|-------------|-------|-----|---|------|--|--|

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

| | | | | | | |
|----------------------|---|--|--|--|--|--|
| 夏秋トマ ト(被覆 栽培) | <p>■トマトかいよう病</p> <p>本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p> <p>■タバココナジラミと黄化葉巻病</p> <p>2006年にタバココナジラミ・バイオタイプQの発生が本県のトマトで確認されています。現在までに、中通り、会津南部、浜通りで本種の発生が確認され、また、本種が媒介するトマト黄化葉巻病ウイルス(TYLCV)も中通り北部、会津南部、浜通り南部で確認されています。</p> <p>本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染、種子伝染、土壌伝染はしません。また、タバココナジラミ以外のオンシツコナジラミ等による虫媒伝染はしないため、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内での発生密度が高くなるないように発生初期から適切な防除を行ってください。</p> <p>また、未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意が必要です。</p> <p>病害虫防除所HPに掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病(TYLCV)のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/450800.pdf</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf</p> | | | | | |
| 夏秋キュ ウリ(露 地栽培) | <p>■アザミウマ類</p> <p>アザミウマ類による花への寄生が多く確認されています。春から秋にかけては周辺の雑草地等で増殖し、常時成虫の飛び込みがあること、生育過程で植物組織中の卵や土中の蛹など薬剤がかかりにくいステージがあることから薬剤のみの防除では十分な効果が得られない場合があります。耕種的防除、物理的防除等も取り入れた総合的な防除を行う必要があります。</p> <p>アザミウマ類の発生源となるほ場内外の除草を徹底し、摘葉や摘芯等により生じた残渣には、アザミウマ類が寄生している場合があるので、放置せずビニール袋に密閉するなどして適切に処分する。定植期に使用可能な薬剤がある場合は施用するとともに、ほ場内の発生状況をよく観察し、発生初期に薬剤防除を行う、薬剤抵抗性の発達を防止するため、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う等の対策をお願いします。</p> | | | | | |
| キク(露 地栽培) | <p>■わい化病(キクわい化ウイルス)</p> <p>本病に感染したキクは健全株に比べ節間が詰まり、被害が大きいと草丈が1/2から1/3にわい化する。本県では6月頃から、キクのわい化症状がみられる。本病は、親株でのほ場への持ち込みが多いと思われる。また、品種間差があり、無病徴感染している場合もある。</p> <p>防除対策として、罹病苗をほ場に持ち込まないことが最も重要であり、病徴が認められたほ場では、親株を更新する。育苗時には、罹病株の残さが混入している土壌は用いず、苗同士の根の接触の少ない育苗(セル成形苗など)を行う。発病がみられた株は速やかに抜き取り、適切な処理(土中深くに埋める、焼却処分する、袋等で密閉して腐敗させるなど)を行う。作業時には、頻繁にハサミをかえるか消毒することにより、汁液伝染を防ぐ。</p> | | | | | |

| | |
|-------------|---|
| 野菜・花 き共通 | <p>■ウイルス病（アブラムシ類、アザミウマ類媒介による）</p> <p>アザミウマ類が媒介するトマト黄化えそウイルス（TSWV）、アブラムシ類が媒介するキュウリモザイクウイルス（CMV）の発生を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV 及び ZYMV 等のウイルスの重複感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p> |
|-------------|---|